

「メリット」の体験

持 田 坦

コルネイユの劇の処女作《Mélite ou les Fausses Lettres》は1629年の暮に上演されたものであろうと推定されている。即ち、コルネイユ23才当時の作品だとされている。この作の原稿は1629年の夏に、コルネイユの生地ルーアンに来た俳優 Mondory に手渡された。モンドリーはそれをパリに持帰り、その年の暮から翌年にかけて、恐らくはサン・マルタン区のバルトーのテニスコートで上演して注目を集め、オテル・ド・ブルゴーニュで上演されていた Mairet の《Silvanire》の観客を奪ってこれを圧倒したといわれている。この成功は余程コルネイユを喜ばせたものと想像される。彼は自作の成功を見にパリに出て来た。彼はモンドリー一座のものと話をし、初めて劇に24時間の規則があること、自作がその規則を守っていないことを知り、又、この作の筋が peu d'effet であり、文体が trop familier であるという評を得た。(Examen de Clitandre 参照)

コルネイユの劇作家としての生涯は斯くして始められたのであるが、第二作「クリタンドル」の Examen に見られる「メリット」に関するこの簡単な記述は、首都を遠く離れた一地方都市の文学青年のこの処女作が、如何に当時のパリの劇壇からかけ離れた場所で、孤立した世界で制作されたかという事情を語っているように思われる。自分の作品が24時間の規則に従っておらず、筋は起伏に乏しく、文体は余りに日常的すぎる（話し言葉に近いという意味）、という批評を、初めて見るパリで、劇の専門家から聞かされたコルネイユは、恐らく、この時初めて、作者とは又別に、現実に生きて動いている劇の世界があることを知ったのである。即ち、観客と俳優、それに劇評家をも加えた世界が、作者の要求とは又別に存在するということを。しかし、批評家たちの言葉にも拘らず、「メリット」は多数の観客を動員し、メレの「シルヴァニール」を圧倒している。この事実をコルネイユは何と見たであろうか。同じ「クリタンドル」の Examen で彼は次のように云っている。

«……Pour la (Mélite) justifier contre cette censure par une espèce de bravade, et montrer que ce genre de pièces avait les vraies beautés de théâtre, j'entrepris d'en faire une régulière, c'est-à-dire dans ces vingt-quatre heures, pleine d'incidents, et d'un style plus élevé, mais qui ne vaudrait rien du tout en quoi je réussis parfaitement. »

これが第二作「クリタンドル」を書いた動機なのである。即ち、24時間の規則を守り、筋は事件に充ち、高められた文体で、しかもこれらの資格が実は何の価値もないということを証明するような作品を作るために「クリタンドル」を書いたのだ、というのである。勿論これは30年という年月を隔てて自作を回顧する老大家の軽い冗談でもあり得よう。併し、孰れにしても、第二作「クリタンドル」が事実上そのようなものとして出来上がったことは、この作を読めば何人も異議のないところであるし、又この作の動機が、事実「メリット」に対して与えられた上記の批評に対する「一種の挑戦」であったことは、この作の初版（1632年）に付けられた序文を見れば疑いの余地がないのである。

この序文でコルネイユは初めて後年の彼の一面を予想させる、意気軒昂たる姿、謂わば *héroïque* な姿を現わす。注意深くこの序文を読むものには、これが極めて細心な、又極めて直接的な「メリット」評に対する返答であったことは明らかである。彼は先ず最初に前作とこの作を比較して、筋と文体の点でこれ程相違したものが同一人物の手に成ったためしはない、と云ひ、この作の *style élevé* を強調し、次いで、この作の筋の理解し難い複雑さの所以を、多少の誇を以って説明したのち、自分がこの第二作で24時間制を採用したのは、「メリット」でそれを怠ったのを悔いているためでもなく、又以後これを採用しようとしたためでもない。今日或るものはこの規則を尊重し、多くの者はこれを軽視している。自分がこれを採用したのは、自分がそれを識らぬ訳ではないということを示すためだ、と云って、明らかに劇の専門家たちに対して大胆な仕方で負債を返している。次いで彼は、古代人と現代人の比較論に移って近代人の優位を認め（これは17世紀末の有名な論争の先駆と考えられてよいものである）更に劇の構成の困難さに言及して、劇は *par aventure* には作れない、その点、夢や *sonnet* や *ode* とは違ふのだ、と劇作者たることの自覚を進んで表明し、最後に、この作の中に剽竊を見る勿れ、自分の知るかぎりそれはない。如何に美しい思想でも他人から借用したとい

う疑いを掛けられれば、価以上にそれを買うことになるのだ、と私は常に信じて来た。この作品は最近の作家の大部分とは何の共通点も有たぬ筈だと思っている。私がここに表明する多少の *vanité* を別にすれば。

「クリタンドル」の序文は斯うした激しい自意識を表わす言葉で終わっている。「クリタンドル」はこの序文をつけて、1632年、即ち「メリット」の初版の前年に出版されたのであるが、この事実の意味するところは、恐らく、普通の観客にではなく、本で劇を読む人種、——劇作者、劇評家（もっとも当時は劇作者は多く劇評家を兼ねていたが）俳優、および極く限られた知識人など——に「メリット」の作者の側からの弁明と、实例によるその劇作家としての能力の証明とを一日も早く伝えようとしたことにあるのであるが、そのことは又コルネイユの劇界に対する、つまり劇の専門家たちによって形成される世界に対する、美しい野心を語っていると云ってよいであろう。劇の専門家たちに対する征服欲は彼を技術面での絶えぬ反省へ、そして結局は後年の精緻な劇理論へと導いてゆくであろうが、ここにコルネイユの劇作家としての甚だ現実主義的な態度が端的に表われていると思われる。「クリタンドル」は斯くして、はじめて自分の場所を理解し、自分の *métier* を自覚した青年の野心の直接的な所産であったのである。

ところで、今「メリット」を考えるに当って、以上のような「クリタンドル」の制作態度を想起することによって、我々はこの作品の成立をそれだけよく理解することが出来るのである。コルネイユ自身が、この作の成功を回顧して *surprenant* だったと述懐しているが (*Examen de Méliete*)、この言葉は文字通り、この作の成功が彼の不意を襲ったという意味に解してよいのである。又彼は、この作を書くに際して、指導者としては少しばかりの *sens commun* と Hardy その他数人の同時代人の作品しか有たなかった、と云っている。（同上）これらの事を第二作を書く際の激しい劇作家としての *métier* の自覚、場所への *engagement* の意志と比較してみるならば、「メリット」制作の動機がそれとは全く異質のものであって、凡そ野心や征服欲などとは無関係なものであったことを想像し得るのである。

「メリット」はコルネイユ自身の体験の極めて自然な芸術的 *incarnation* であ

った。この点にこの作品のあらゆる基本的な性格が要約され得ると云ってよい。そして又この点で「メリット」は言葉の充分の意味に於いて処女作であると云い得るであろう。この作品の長所と短所、新らしさと古さは、すべて、これが作者の個人的体験の *incarnation spontanée* として成立った作品であるという事実によって極めて自然に理解されるであろう。

ここで「メリット」の梗概を紹介しておく。

チルシスは友エラストの恋の悩みをきいても一向に同情がない。彼は詩人で自称リアリストである。彼は恋を、就中結婚に対する情熱を理解しない。唯一人の女への一生の奉仕。それに子供。理性があれば自明の問題だと彼は云う。彼が結婚するなら金のためだ。金さえあれば醜女も美しいからだ。エラストは金持だが、チルシスは極くつましい家の息子である。(Sc. I) エラストは恋人メリットをチルシスに紹介する。彼は二年間メリットの非情を忍んで来たのである。チルシスは忽ちメリットの美に打たれる。(Sc. II) チルシスは今や恋を解し、不幸な友エラストのためにソネを代作することを申出る。エラストは友の申出に疑惑を感じ、詩作以上の意図はないという言質を取ったのちにその申出を受入れる。併しチルシスの考えでは、恋に関する限り約束は反古にしてもいいのである。(Sc. III) チルシスの妹クロリスとその恋人フィランドルと会い、フィランドルにはクロリスの賢いコケットリーに悩まされた末、漸く接吻を頂戴する。(Sc. IV) そこへチルシスが来合せて新しい恋を仄かす。クロリスは相手の名を訊ねるがチルシスは明さずに去る。クロリスは兄の跡を追つて去る。取のこされたフィランドルはクロリスを恋人とするには我慢が要るわいと歎息する。(Sc. V) 以上第一幕

チルシスに恋人を奪われたエラストの苦悶の独白。(Sc. I) エラストは哀しい冷笑によってメリットの不実を責めるようと最後の努力を試みるが、メリットはチルシスへの心を隠そうともせぬ。(Sc. II) 再びエラストの独白。二人の裏切りに対する復讐の手段を思案する。(Sc. III) チルシス妹クロリスに自作のソネを朗読して意見を求める。妹メリットの名に驚く。併しチルシスは友への裏切りに気を沈ませ、又エラストの財産の威力がメリットの母の心を捕えるであろうし、メリットは又母への義務に抗し得まいと憂えている。

クロリスはその執れも顧慮するに足りぬと兄を励ます。(Sc. IV) エラストはメリットからフィランドルに宛てた偽の恋文を書いて、クリトンを使ってフィンランドルに読ましめる。(Sc. V, VI) チルシスはエラストに会い、約束のソネを手渡そうとするがエラストは受けずに去る。(Sc. VII) チルシスとメリット愛を語る。メリットは母への義務もチルシスへの愛には勝てぬと云う。チルシスはエラストのために代作したソネを捧げる。(Sc. VIII)

以上第二幕

フィランドルの独白。メリットに恋される喜びとクロリスへの愛想尽かしの嫌悪。(Sc. I) フィランドルはチルシスにその喜びを語り、偽造された恋文をみせる。チルシス怒って決闘しようとするがフィランドルは構わず逃げる。(Sc. II) チルシス絶望の独白。(Sc. III) クロリス来て手紙を読み、兄を慰めるが、チルシスは死だけが救いだと云って去る。(Sc. IV) クロリス、恋人フィランドルの変節について沈着な思案の独白。(Sc. V) フィランドル、チルシスを尋めて決闘すると云う。(Sc. VI)

以上第三幕

メリットとその乳母の対話。乳母は婚期を控えた娘の男を遇する道を説き、エラストとチルシスの財産を比較してエラストを尊重すべしと警める。(Sc. I) クロリスとメリットの誤解に基づく対話。メリット偽の手紙を見せられ、漸く何者かの奸計あることを悟って憤る。(Sc. II) そこへチルシスが絶望の果に悶死したとの報が来る。メリット失神し、(Sc. III) クリトンと乳母に運ばれて去る。(Sc. IV) エラスト計画成功を喜んでいると(Sc. V) メリットも恋人の跡を追って死んだと告げられ、乱心する。(Sc. VI) エラスト乱心の独白。フィランドル、決闘にチルシスを尋めて到り、エラストが偽の恋文の作者であることをその乱心の独白に聞き、事の次第を悟る。(Sc. VIII) しかしチルシスとメリットの死は虚報であったと知れる。(Sc. X) 以上第四幕

エラスト再び乱心の独白。彼は自ら地獄にありと信じている。乳母これを正気に戻そうと努める。(Sc. II) フィランドル、クロリスに不実の宥しを乞うがクロリス聴かず。(Sc. III) チルシス、メリット再び愛を語る。メリットは愛の力で頑固な母から二人の結婚についての同意を得た。(Sc. IV) エラスト正気に帰ってすべての罪を謝して宥しを得、フィランドルに代ってクロリスの許婚者となり、その日のうちに二組の結婚式を行うことになる。(Sc.

VI)

以上第五幕

この喜劇が作者の恋愛の体験に端を発していることについては古来多くの証人がある。コルネイユの甥、フォントネルは1685年、即ちコルネイユの死後三年に次の如く書いている。「彼は詩のことなど想ってもいなかった。彼は自分の有っている異常な才能を識らなかった。そこへ小さな情事が起り、彼はその真実に幾分か付け加えてそれを脚本に作り上げることを思いついた。彼は自分が当時新しいジャンルであった喜劇の作者となって全く驚いた。……これが彼の作品集の巻頭にあつて「メリット」と呼ばれているあの喜劇である。ルーアンではこの作品の主題である情事を生れさせた婦人にメリットという名を屢々与えたものだ。ともかく、全フランスがこの婦人に偉大なコルネイユを負っていることは確かである」(Nouvelle de La République des Lettres)

フォントネルは更に約45年経ってから、多少の新らしい事実を付け加えて次の如く書いている。「或る青年が友達の一人を自分の恋している娘のところへ連れていった。新参者は紹介者の犠牲において娘の寵を得た。この情事の喜びがこの男を詩人にした。彼は喜劇を作り、かくして偉大なコルネイユが生れたのである。斯ういう事情で彼の最初の作品は「メリット」であったのである。この作の主題を生れさせた女性はルーアンでは長い間彼女にとって名誉な、メリットという名を有っていた。この名は、彼女の恋人が受けたすべての讃辞に彼女を結びつけていたのである。」(Histoire du théâtre français, 1729)

コルネイユの弟トマは多少趣を異にした証言を遺している。「一つの情事が、彼の愛していたその娘のために以前作ったソネを其処で使うために、喜劇を作ることを彼に企てさせた。この作の中ではその情事全体が取扱われているのだが、彼はそれを「メリット」と題し、異常な成功を収めた」(Dictionnaire géographique et historique, 1708)

この他にも同様のことを記したものはあるが、それらは直接間接にこの三つの証言に基づいているのではないかと思われる。フォントネル二つの証言を一つにすれば、友達の人を介してその人と恋に落ちるといふ喜劇の

冒頭の部分はコルネイユ自身の体験であり、この体験に幾分かつけ加えたものがこの喜劇だというのであり、トマのそれは、コルネイユは恋人のために嘗て一篇のソネを作った、それを後になって喜劇に使うことを思いついた、斯うして出来た「メリット」の中にはこの恋の経過のすべてが書かれてある、というのである。このトマの証言はコルネイユは恋人を喜ばすために「メリット」を書いたのだ、と云っているらしく思える。がともかく、「メリット」がコルネイユの恋愛の体験に根ざしている点では二人の証言は一致している。

ところで、以上二人の証言を裏付ける資料となるのは、コルネイユの最初期の詩作を集めた *Mélanges poétiques* である。これは第二作 *Clitandre* の初版（1632年3月20日発行）の後半に合せて収録されたものであって、この中の十数篇の詩が我々の有するコルネイユの「メリット」以別の文学作品の全部であるが、この詩集は「メリット」の契機となった作者の恋に関するフォントネルとトマの証言を十分に裏付けているように思われるのである。

先づこの集中第九番目に置かれたソネ (*Marty Laveaux, tome X, p. 44*) は、恰もトマの証言を保証するかの如く、喜劇の第二幕、第四場に於いて殆んどその儘の形で（第二の *quatrain* の三行目の最初 *Et quoiqu'elle ait ...* が喜劇では *Et bien qu'elle ait ...* となっているが）使われている。これは喜劇の中の使われた場所からも察せられる通り、「愛されずにメリットを恋する」男の歌である。

第二にこの集中第十二番目に置かれた *Dialogue* と題する詩 (*Marty Laveaux, tome X, p. 50*) は、初心な恋を語り合う男女の対話であるが、その男は喜劇の主人公と同名のチルシスであり、この詩も又、喜劇の第五幕第四場に於けるチルシスとメリットの間之交される対話を書く際に想起されたものであることは疑いない。*Marty Laveaux* はこの詩はコルネイユがその恋人 *Mlle Milet* の愛の告白を得たときに書かれたものであろうと臆測している。（但し、この *Mlle Milet* という名は *Mélite* のアナグラムとして想像された単なる伝説であって、実は *Catherine Hue* であることについては、最近 *Georges Couton* の研究が発表されている。）事実、全体で四十行の男女の対話から成るこの断章は、その純粹で孤独な魂の不安な旋律によって、相互の愛の告白でありながら、同時に恋するということの一種の不幸を直接に伝える甚だ近代的な抒

情詩となっている。

Mélanges と「メリ ット」との関係として第三に挙げ得るのは、Mélanges の最初に置かれた詩《A monsieur D. L. T.》と喜劇の冒頭、第一幕、第一場におけるチルシスの意見との間に在る著しい類似点である。文学青年チルシスは結婚の幸福を信じない。彼は、恋の悩みは詩を習う役には立つが、結婚に役立つものは恋ではなくて金だと云う。彼はメリ ットへの二年越しの不幸な恋に悩むエラストに向つて斯う訓えている。

« Si c'est là le chemin qu'en aimant tu veux suivre,
 Tu ne sais guère encore ce que c'est que de vivre.
 Ces visages d'éclat sont bons à cajoler ;
 C'est là qu'un jeune oiseau doit s'apprendre à parler ;
 J'aime à remplir de feux ma bouche en leur présence ;
 La mode nous oblige à cette complaisance ;
 Tous ces discours alors sont de saison :
 Il faut feindre du mal, demander guérison,
 Donner sur le phébus, promettre des miracles ;
 Jurer qu'on brisera toute sorte d'obstacles ;
 Mais du vent et cela doivent être tout un. »

« La beauté, les attrait, le port, la bonne maine,
 Echauffent bien les draps, mais non pas la cuisine ; »

« C'est assez qu'une femme ait un peu d'entregent,
 La laideur est trop belle, étant teinte en argent. »

一方 Mélanges の巻頭の Epître, 《A monsieur D. L. T.》も亦、恋が軛でしかなく、恋を抜け出してはじめて人は幸福になれる、ということを自己の《expérience》から恋する友に向つて説いている教訓詩なのである。そしてここでも矢張り、恋の悩みは詩を習うのに適していると云われている。

« Enfin échappe du danger
 Où mon sort me voulut plonger,
 L'expérience indubitable
 Me fait tenir pour véritable

Que l'on commence d'être heureux
Quand on cesse d'être amoureux.»

« J'ai passé par là comme toi ;
J'ai fait autrefois de la bête ;
J'avais des Philis à la tête :
J'épiais les occasions ;
J'épiloguais mes passions ;
Je paraphrasais un visage ;
Je me mettais à tout usage,
Debout, tête nue, à genoux,
Triste, gaillard, rêveur, jaloux ;
Je courais, je faisais la grue
Tout un jour au bout d'une rue :
Soleils, flambeux, attraits, appas,
Pleurs, désespoirs, tourments, trépas,
Tout ce petit meuble de bouche
Dont un amoureux s'escarmouche,
Je savais bien m'en escrimer.
Par là je m'appris à rimer ;
Par là je fis sans autre chose
Un sot en vers d'un sot en prose ; »

最後に喜劇の第一幕第三場でチルシスがメリットを初めて見た直後、その心の衝撃を語る言葉と、*Mélanges* の第二番目におかれた *Ode sur un prompt amour* (Marty Laveaux, tome X, p. 30) との符合を挙げなければならない。Ode の第一節は次の如くである。

« O Dieu ! qu'elle sait bien surprendre !
Mon coeur, adore ta prison,
Et n'écoute plus ta raison
Qui fait mine de te défendre ;
Accepte une si douce loi.
Voir Amynte et rester à soi
Sont deux choses incompatibles :
Devant une telle beauté,

C'est à faire à des insensibles

De conserver leur liberté.»

一方劇中のチルシスの言葉は次の如くである。

« Que veux-tu que j'en die? elle a je ne sais quoi

Qui ne peut consentir que l'on demeure à soi.

Mon coeur, jusqu'à present à l'amour invincible,

Ne se maintient qu'à force aux termes d'insensible ;

Tout autre que Tircis mourrait pour la servir.»

以上 *Mélanges* 中の四篇の詩, Sonnet, Dialogue, Epître, Ode と, 「メリット」中の夫々の箇所に対応を指摘したのだが, これらの対応がすべて同じ性質のものではないことは明らかである。第一の Sonnet のそれは完全な言葉の符合であり, 第二の Dialogue のそれは言葉の符合であると同時により多くそこに現われる男女の精神的境位の類似であり, 第三の Epître のそれは恋及び詩に関する態度の結論として的一致であり, 最後の Ode のそれは, 主として発想法の一致である。これらの対応は何を語っているだろうか? コルネイユは「メリット」を書くに当って旧詩篇を取出して利用し, 出来るだけ自分の恋に忠実であろうと努めたのであろうか? そうらしく見える。併し第一の Sonnet はその中でも特別な資格を要求しているように見える。トマの証言はその点で矢張り真相を語っていると云えないだろうか。

併し今ここで特に問題としたいのは, これらの詩篇の排列の順序である。というのは, 詩集の冒頭に恋する青年に対して恋が幸福の障げであり, *bêtise* にすぎぬという教訓詩を置き, 第二番目に, 恋に対して *invincible* な心が突然恋に打負かされるという Ode を置いたこの排列の仕方は, 喜劇の中で, チルシスがエラストに向って第一幕第一場で恋に関して犬儒的な言葉で教えを垂れた後でメリットに会い, 忽ちその美に打たれて恋に陥るといふ, この変化に正確に対応しているからである。そして, 恋しながら女の心を得るに到らぬという Sonnet は第九番目に, 女の愛の告白を得る Dialogue は第十二番目に来る。これで両者の関係は明らかであろう。*Mélanges* の排列は喜劇の筋を追っているのである。Marty Laveaux はこの詩集の排列は必らずしも制作年代に依っておらぬらしいと推測しているが, 我々の今の問題はコルネイユが

何故こういう順序で *Mélanges* を出版したかという点である。

一言で云うならば、この *Mélanges* は「メリット」に対する註釈であったのであり、この註釈は、「メリット」が劇に対して何の野心も何の準備も有たなかった一青年の恋の所産だという秘かな告白だったのである。コルネイユは「メリット」に対して加えられた批評（24時間制を守っていないこと、筋が起伏に乏しいこと、文体が話し言葉に近いこと）に驚きもしたが、結局それを完全に認め受入れた。「クリタンドル」自体が何よりも明白にそれを証拠だてている。即ち、この作は、24時間制を守った点ではフランスにおけるこの種の劇（悲喜劇）において最初の作品となり、筋は古来理解し難いという声も聞かれる程複雑なものとなり、文体が日常的なものから昂揚されたものに変えられた点では早くも後年の悲劇の或るものを予知せしめている。だが斯く批評家の要求を完全に満足さす作品を書くこと自体が批評家に対する「一種の挑戦」であったことは既に引用したこの作品の *examen* (1660年) に云われている通りであるし、又「序文」が雄弁に物語るところでもある。この「序文」で彼は劇理論の面における自己の優越を大胆に誇示しているのである。しかし自ら完全に認め受入れた批評を放った批評家に対して彼は何故挑戦したのであるか。何故ならそれが「メリット」——恋の果実に対する批評であったからだ。勿論これは劇理論と自己の体験というものに関して自己矛盾に陥った態度に見える。というのは、批評家の言を正当化した作品である「クリタンドル」が、結局その後に附した *Mélanges* を、——即ち、「メリット」の体験を擁護するために使われていると見えるからである。又斯くして、コルネイユは第三作《*La Veuve*》に於いて明らかに「メリット」の世界に帰ってしまうからである。ここでは24時間は守られず再び五日に引延ばされ、「メリット」は二週間、文体も又日常的なそれへ再び近づいている。

「メリット」が作者にとって特別な作品であったことは、この作品が「クリタンドル」に遅れること一年にして漸く出版されたとき、その序文の冒頭に、*« Je sais bien que l'impression d'une pièce en affaiblit la réputation : la publier, c'est l'avilir ; »* と書き、更に続けて *« et même il s'y rencontre un particulier désavantage pour moi, vu que ma façon d'écrire étant simple et familière, la lecture fera prendre mes naïvetés pour des bassesses. »* と云って、読者の誤解を予め解

く注意深さを見せていることから十分に察せられよう。(又此の言葉でコルネイユが批評家の言を如何に聞いたかが判る)まして、作家が自作を出版するのは所詮選けられぬ運命だ、ロンサールもマレルブもテオフィルも出版した。自分は彼等の優雅を做ることが出来ぬなら、せめて彼等の誤ちに倣おう。もし出版することが誤ちであるならば。とある条りの憂慮と郷愁をみれば疑いは有り得ぬであろう。一方、コルネイユが自ら直接に「メリット」の契機となった恋を語ったものに *Excuse à Ariste* (1637年出版) がある。

J'ai brûlé fort longtemps d'une amour assez grande,
 Et que jusqu'au tombeau je dois bien estimer,
 Puisque ce fut par là que j'appris à rimer.
 Mon bonheur commença quand mon âme fut prise :
 Je gagnai de la gloire en perdant ma franchise.
 Charmé de deux beaux yeux, mon vers charma la cour,
 Et ce que j'ai de nom, je le dois à l'amour.

以下二十数行に亙ってこの恋の経緯を——呑むしろこの恋への愛惜と尽きぬ感謝の念を綴っているが、これが「メリット」に関係する女性であることは、《*mon vers charma la cour*》という一句と「メリット」の *Examen* の中に (*Le succès de cette pièce*) *me fit connaître à la cour.* とある箇所との符合が決定的にこれを証明している。Granet の伝えるところに依れば、コルネイユはこの女性(即ち Catherine Hue) のために書き留めた詩を友の勧めにも拘らず遂に公けにせず、死ぬ二年前に自分の手で焼き捨てたという。《*Et que jusqu'au tombeau je dois bien estimer*》は文字通り果されたといえるかも知れない。いずれにしても、これがコルネイユの *grand amour* であったことに相違はない。

コルネイユは自分の恋の体験に基いて「メリット」を書いた。「メリット」に対して加えられた批評に対して彼は自作を擁護しようとした。「クリタンドル」の初版がそれである。序文で挑戦し、本文で要求を容れ、附録の *Mélanges* で「メリット」は体験以外の何でもないと秘かに告白する。これはすでに理論に対する体験の権利主張なのであって、*docte* たちに対する彼の後年の流儀を想起せしめるに充分である。しかし、このような態度を彼に可能

ならしめたのは、批評家の言葉にも拘らず「メリット」が観客を喜ばしているという事実であった。恐らく彼はこの事実の中に自己の体験を正当化する理由を見たのである。彼は劇の目的を「喜ばすこと」(plaire)に置くかmoeursの教化に「役立つこと」(profiter)に置くかという議論に於いて、迷うことなく前者を支持した少数の一人であった。しかしその明確な表明は1645年の《La Suite du Menteur》に附された Epitre まで待たなければならない。彼はこの Epitre の中で《notre art n'a pour but que le divertissement》とはっきり定義している。だが特に興味深いのは、彼が前作《Le Menteur》に較べてこの《La Suite du menteur》が成功しなかった理由を反省して、これは俳優が悪かったのでも、観客の判断が誤っていたのでもなく、自分だけが悪かったのだ、と云い、自分がもっと効果を考え、より観客の好みに合う主題を撰ぶべきだったのだ、と結論したのちに、若し自分が詩の目的を plaire と同時に profiter だとする人々の仲間なら、私はこの作が前作よりも遙かに良いものであることを人に納得させようと努めるだろうが、と云っている条りである。(Marty Laveaux, tome IV, p. 279) 劇の目的を plaire だとする考えについてこれ以上具体的であることは困難であろう。これがコルネイユの劇作者としてのリアリズムである。そしてこの plaire という原理によるリアリズムは早くも「メリット」における自己の体験の擁護を動機とし、「メリット」の事実上の成功を力として、謂わゞそれを中間項として、反省的に把握されていたのである。

「メリット」の初版の序文は次のような言葉で終わっている。

« En tout cas, elle (Mélite) est mon coup d'essai ; et d'autres que moi ont intérêt à la défendre, puisque, si elle n'est pas bonne, celles qui sont demeurées au-dessous doivent être fort mauvaises. »

即ち「メリット」の事実上の成功がその評価に決定的なのである。この態度は、1665年に Horace (1640年) に関して l'abbé d'Aubignac との間に行った論争に於いても変わっていない。この論争の直接の契機となったのは1660年の《Discours des trois unités》の結びの一句である。

« Quoi qu' il en soit, voilà mes opinions, ou si vous voulez, mes hérésies touchant les principaux points de l'art ; et je ne sais point mieux accorder les règles anciennes avec les agréments modernes. Je ne doute point qu'il ne soit aise d'en trouver de meilleurs moyens, et je serai tout prêt

de les suivre lorsqu'on les aura mis en pratique aussi heureusement qu'on y a vu les miens.》

これが docte たちに対して刺戟的に働かぬのはむづかしかろうが、最後の一句を「メリット」の序文のそれに較べてみるがよい。考え方は全く同じである。これが「メリット」についてコルネイユ自身が1633年に到達した結論的な態度であるが、一方、序文と「クリタンドル」と *Mélanges* とから成る前年の第二作初版の矛盾した複雑な表情は、そのままコルネイユの「メリット」の体験に対する劇作者としての動揺を物語る一つの *étape* を意味しているのである。

劇の目的を *plaire* だとするとはコルネイユにとって何を意味したか？ それは勿論コルネイユが規則に精通した理論家であることを妨げるものではなかった。唯、彼は *plaire* を、余りにも明瞭に、すべての規則を絵べる規則として理解していたのであって、彼が docte たちに対して、屢々、不用意に見せた侮蔑的な態度はその結果に他ならぬ。そして *plaire* がそのように理解されるとき、それはもはや、一般的な「拘束するもの」の根拠としてではなく、芸術に於いて自由な個人的創造を理由づけるもの、個性を、或いは、体験を芸術の中に於ける正当化するものとして、把握されていたのである。彼は「メリット」で自分の恋を書いた。つまり「メリット」は一つの体験であった。そして彼はそれを擁護しようとした。これは又別種の、劇作者としての一つの体験であった。

(本研究は文部省科学研究助成補助金によるものである)